



発行所  
公益社団法人 国民文化研究会  
(九州←→東京←→全国)  
東京都渋谷区東1-13-1-402  
振替 00170-1-60507  
電話 03-5468-6230  
FAX 03-5468-1470  
https://www.kokubunken.or.jp  
E-mail: info@kokubunken.or.jp  
月刊「国民同胞」編集部  
毎月一回10日発行  
購読料 年間2000円

## 日常を見つめ直す「合宿教室」への誘ひ

—空虚な物識りになつて安心してゐないか!—

池松伸典

昭和五十三年に熊本県阿蘇で開催された第二十三回全国学生青年合宿教室では、文芸評論家の小林秀雄先生にお越しいただき本合宿にとつて最後となる五回目の御講演を頂戴した。この時、先生は七十六歳で、十年をかけて取り組まれた畢生の大作『本居宣長』がその前年に発行されたばかりで、世間でも何かと話題になつてゐた頃である。登壇された先生は最初にこのことにお触れになつて、「本居宣長についてちよつと分りやすく話してくれ」との注文が非常に多くなつたと当時の世相に言及された。何でも「手っ取り早く、苦勞しないで早く分りたいとする」症状、「これは現代の病氣だと思ひたい位です」と話されたのであつた。それから四十数年がたった現在、世の中は科学技術の更なる進歩によつて一層便利になり、欲しい情報や知識が手間

暇<sup>ひま</sup>かけずに容易に得られるやうになつてきた。大なり小なりその恩恵を被る中で知らず知らずのうちに「現代の病氣」に罹患してゐる我々にとつて、果たして現代はどのやうな時代なのであらうか。自らを振り返つてみると、時代の潮流に流されてしまはないやうにしてゐるつもりでも、「空虚な怠惰な物識りになつて安心してゐる」自分の姿が見えてくる。どうも「現代の病氣」は当時からするとますます急速に進行し、その症状は深刻さを増してきてゐるやうに思はれてならない。

昨年の合宿教室では文芸評論家の竹本忠雄先生が「大和心のかたちと秘密—現代文明の変貌に真向かいて—」と題して御講演された。和歌を具体的に取り上げて語られる先生の一言一言を通じて大和心の真髓を垣間見させていただいた。その一つに柿本人麻呂の歌

がある。

ひむがしの野にかぎろひの立つ見えてかへりみすれば 月かたぶきぬ

私にとつても前から心に残つてゐた歌であつたが、先生が「大和言葉では、『顕れる』があるのと同様に、『隠れる』があります」「日月が顕れ、隠れていく、旋回していく、この壮大なムーブメントが感動を誘ふ」と話された時には驚かされてしまった。その後改めて万葉集を繙き読み重ねるにつれて、作者の様々な心境が思はれてきて、底知れない万葉人の魂に引き込まれていった。

「かぎろひ」とは山の端が燃えてゐるかに見える日の出直前の姿なのだらうかと思つてゐたが、「東天はまだ卵のしろみの様には白い光を帯びた頃とみる。従つて月は光つて居ると思ふ」との捉へ方もあつた。一体万葉の人々が眼にしてゐた情景はどのやうなものだったのだらうかと想像力を働かせていくにつれて、歌の言葉が更に深く美しく感じられてくる。

万葉集の専門家でもない私には正解を求める気持ちは当然ないが、歌から現れてくる古代人のおほらかでたくましい精神の中に我々現代人が置き忘れてゐた貴い教へが潜んでゐるやうに思はれる。

今年も初日の出を拝みに自宅近くの公園に行った。暗いうちからそこへ向ふ道中は老若男女が列をなしてゐた。いつもの日の出と同じなのに誰もが初日の出は見に行きたくなるのは昔も今も変わらないなと思ひつつ、身動きできないくらゐに集まつてゐる高台でしばらく日の出を待った。山の稜線がだんだんと明るくなって、いよいよ初日の出だとじつと山の端を眺めてゐると多くの人がスマホを取り出し、太陽が顔をのぞかせる瞬間を撮りはじめ、カシヤカシヤといふ音があちこちから聞えてきた。直に自分の目でじつと拝んでゐる人の姿は私の周りにはなかった。

今年も東京・八王子市の大学セミナーハウスで第六十九回の全国学生青年合宿教室《主会場》が開催される。招聘講師に皇學館大学文学部教授の松浦光修先生をお迎へして「幕末の志士に学ぶ—その死生観を中心に—」と題して御講演していただく。自然豊かな環境の中で二泊三日間、日常の喧騒を離れて、ご登壇の諸先生方のお話に耳を傾け、また参加者同士で語り合ふ中で、日常を見つめ直す貴重な機会を得られることと思ふ。多数のご参加をお待ちします。

(副理事長、若築建設(株))